究科・博士課程（東南アジア地域研究専攻）在籍。
③**生年・出身地**……一九七二年、大阪府。
④**専門分野・地域**……ベトナム地域研究。
⑤**学歴**……日本大学芸術学部、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士課程（東南アジア地域研究専攻）。
⑦**現地滞在経験**……ベトナム（主夫、三五歳、二年間、現地調査）。
⑧**研究手法**……①現地の映画館、フィルム・アーカイヴでひたすら映画を観る。②ＤＶＤ屋でＤＶＤを、古本屋で映画雑誌を買いあさり、読む。③映画関係者への聞き取り調査。飲酒。④図書館で映画の元ネタをコピーする。帰国時、苦労の末、集めた資料を空港で公安にポルノと間違われて没収されかけた苦い体験が映像の裏を推測するのに少しは役立っているかもしれません。
⑨**所属学会**……東南アジア学会。
⑩**研究上の画期**……一九七五年四月三〇日、サイゴン解放と陥落。ベトナムをとらえるうえで、首都ハノイだけではなく、ホーチミン市、さらにサイゴンからの視点も取り込み、より複眼的な視野が必要だと感じつつあります。
⑪**推薦図書**……近藤紘一『サイゴンから来た妻と娘』（文春文庫、一九七八年）。
⑫**推薦する映画作品**……『残酷ドラゴン　血闘竜門の宿』（原題『龍門客棧』、キン・フー監督、一九六七年、台湾）。

【カンボジア】
都市の混沌と錯綜する想い

岡田知子

「立派な屋敷が立ち並び大勢の人々が行き交う都会に、ソパートはとくに不安を感じなかった。さまざまな車が大通りを走っていた。彼は目を丸くし、心躍らせながら四方八方を見渡した。」これはカンボジア初の散文小説『ソパート』（ルム・クン著、一九三八）の一節である。生き別れた父を捜すという固い決意を持って単身上京した少年ソパートは、初めてのプノンペンに臆することはないが、生まれ育ったタイ国境近くの町との差異に驚きを隠せない。この状況は六〇年近くたっても変わらない。『戦争のあと

の美しい夕べ』では、ベトナム国境近くの村から女衒に連れてこられた少女が、プノンペンに到着したバスのステップで立ち止まり、まるで異国に来たかのようにあたりを見回し、バスから一歩を踏み出すのをためらう。

七本の主要な国道はすべてプノンペンを中心として放射線状に延びている。地方分権という言葉はカンボジアのさまざまな公的資料に見られるが、徹底的な中央集権制が敷かれているのが現状である。地方とプノンペンの隔たりはあまりにも大きい。

カンボジアはアンコールを通して語られることが多い。大著『カンボジアの農民』を書いた地理学者デルヴェールは、「カンボジア人を研究するということはカンボジアの農民の研究をすること」とも言っている（デルヴェール 二〇〇二：四五）。だが、プノンペンを抜きにしてカンボジアを語ることもまたできはしない。

一九五三年にフランスから独立した後、半世紀の間に五回に渡って政治体制が変わり、そのたびにプノンペンには新しい国旗が掲げられ、新しい国歌が流れ、道路名も変わった。人々の間では、街を讃え懐かしむ種々の「プノンペン」の歌がその都度流行った。そんな激動の時代に翻弄されてきた都市プノンペンとそこに生きる人々の想いはどう変容してきたのだろうか。

『魅惑の森』における「黄金のまどろみ」

一九六〇年代、東南アジア随一の都市景観を持つと言われたプノンペンの近代的な都市整備が本格的に始まったのは独立以降だった（デルヴェール 一九九六：九六）。国家元首シハヌークの指揮のもと、ル・コルビュジエに師事した新進気鋭の建築家ヴァン・モリヴァンは、プノンペンを象徴するランドマークを次々と築いていった（Muan and Ly 2001: 16）（写真1）。一九六四年の『ナショナル・ジオグラフィック』では、「カンボジア――インドシナの『中

写真1　ヴァン・モリヴァンのデザインによる集合住宅（1960年代）

（出所）Muan, Ingrid and Ly Daravuth 2001: 13

立』の僻隅」として三八ページにも及ぶ特集を組み、シハヌークのやや左寄りの中立政策のもと、繁栄する首都プノンペンと豊かな自然の広がる地方の様子を伝えている。シハヌークの目指した近代的国民国家は数ある彼の映画作品にもみられる。興行用ではなく一般人が見る機会は少なかったが（Muan and Ly 2001: 172）、国際的にカンボジアを紹介する広報映像としての役割を果たした。たとえば『魅惑の森』は、シハヌーク自ら演じる森の王が、狩猟で森に迷った一行に、自然と文化が豊かで素晴らしい民族の住む王国を案内するという話である。「国際水準」の宿泊施設や料理、伝統舞踊、民族舞踊に始まり、バレエやオーケストラ、混成合唱も披露し、文化芸術水準の高さを示そうとした。また、『一九六五』は、当時のカンボジアの状況を、プノンペンの街並みを中心に教育、医療、農業、工業など分野ごとに解説したものである。バックに流れるシハヌーク作詞作曲の「プノンペン」は、この時代を追憶させる歌となった。

庶民にとっても、今となってはまるで「黄金のまどろみ」のように感じられる平和で繁栄した時が流れていた。「東洋のパリ」「東南アジアの真珠」と呼ばれた当時のプノンペンは、四六キロ平方メートルに四五万人を抱えたこじんまりした街だった（高橋 一九七二：二二）。『ゴールデン・スランバーズ』は、映画産業が最盛期であった一九六〇年代から一九七〇年代前半に焦点を当てて、現存するわずかな作品の一部をイメージとして織り込みながら、当時の映画関係者や撮影現場に居合わせた村人、観客のインタビュー、そして今ではカラオケ・クラブや約一七〇世帯の棲家となっているかつての映画館など、現在のプノンペンの風景から「黄金のまどろみ」の世界を再構成する。凝縮された期間と地域の中で、四〇〇タイトルを上回る国産映画が三〇もの映画館で日夜上映されていた。[*1] バサック劇やジケー劇と呼ばれる歌劇風の大衆芸能で演じられていた古典物語や伝説を題材とする場合が多く、ひとつの作品に愛、困難、絶望、コメディ、アクションを盛り込むのが約束事になっていた（Muan and Ly 2001: 171）。人々はかつての映画のシーンの断片、古い写真やポスターを見て、また挿入曲に耳を傾けながら、映画にまつわるエピソードを述懐する。この作品を見たカンボジア人たちは、「亡くなった両親やきょうだいの顔は忘れつつあるが、銀幕スターたちの顔はよく覚えている」「歌のタイトルを言ってくれれば何の映画かわかる」という出演者たちのセリフに頷きながら、「両親と着飾ってオート三輪に乗って見に行った」「親の膝の上に座って映画を見ながらカボチャの種やハスの実を食べ散らかした」とその記憶を鮮明に呼び起こす。だがスクリーンの中の映画人たちの幸せな懐古はふとした瞬間に無念と悲嘆へと変わり、異なる想いをたぐ

り寄せる。この想いの錯綜は、「黄金のまどろみ」を持つ人々の日々の営みになっているのである。

都市と都市住民の消滅

一九七五年四月一七日から一九七九年一月七日までのポル・ポト時代はプノンペンを一変させた。[*2] 国民七〇〇万人のうち少なくとも一七〇万人が飢餓、病気、拷問、強制労働によって命を落とした。内戦の影響で地方から流入した避難民で二〇〇万人に膨れ上がっていたプノンペンは、この時代、二万人以下に縮小したと言われている（ポンショー 一九八六：六三）。貨幣や市場による経済活動、伝統文化、宗教、学校教育等を禁止し、人々を地方へ強制移住させることで、「文明で腐敗しきった」都市と都市住民は消滅した。

仏教で定めるところの八大地獄を越えるという意味のタイトルがついた『九層の地獄』は、一九六〇年代後半にチェコスロバキアから派遣されていた青年医師トマと資産家の娘ケマーとの出会い、結婚、別離に始まり、同政権崩壊後、ケマーとその子どもを捜しに来たトマが、ケマーを知る人々の語りを聞きながらその足取りを追う物語である。クメール・ルージュによって着のみ着のまま強制退去させられ、ケマーは家族とも離れ離れになり、路傍で出産する。その後、農村で性別や年齢別の班に分けられ重労働に従事、強制結婚させられる。ケマーはその美しさから革命雑誌の表紙を飾るモデルとして採用され、プノンペンにある政治犯収容所で働くことになるが、裏切り者として投獄された兄を見舞ったことから処刑される。

この作品はベトナム指導型の社会主義政権にあったカンボジアで撮影され、ポル・ポト時代前後のプノンペンの実際の様子に迫る数少ないものである。[*3] 巨大なホテルのプールにイスが浮かび、ごみが散乱した部屋は蛇が巣くう場所となり、中央市場には人の気配はなく、数百足もの脱ぎ捨てられた靴だけが散乱しているという冒頭で映し出される光景は圧巻で、四年弱の間にプノンペンを襲った狂気を如実に物語っている。

戦争のあとの都市のカオス

三〇年近く続いた政治的混乱は国連の介入により終結したが、身体的な暴力は自由という名の暴力にとって代わった。社会主義は消滅し、市場経済の導入のもと、カオスにも似た自由主義が人々を拝金主義へと走らせた。プノンペンは、一握りのニューリッチ、土地を持たない農民、復員兵士、地雷の被害者、ストリート・チルドレン、売春婦など、家族の絆も人との信頼関係も途切れ、拠り所を失い、孤立した人々で溢れ、現在の社会問題の素地を生み出した。『戦争のあとの美しい夕べ』は、ＵＮＴＡＣが駐留し

ていた一九九二年頃のプノンペンを舞台とした若い復員兵とナイト・クラブで働く娘の悲恋物語である。ソヴァンナーはポル・ポト政権下で家族を失い、同政権崩壊後、ベトナムに支援された政府に徴兵され、タイ国境のポル・ポト派との前線に送られた。内戦が終わり、幼少期に家族で暮らしたプノンペンに戻るが帰るべきところはない。一方、スライ・ポウは地方にいる大家族を養うため、プノンペンに身売りし売春を余儀なくされていた。平凡で幸せな家庭を築くためにソヴァンナーは宝石店に強盗に入るが、銃弾に倒れて死に、身重のスライ・ポウだけがとり残される。都市が記憶喪失となり、「黄金のまどろみ」を持てず、暴力と無為に溢れたことで、ソヴァンナーをはじめとするポスト・ジェノサイド世代は自分が理解できない政治的現象によって家族を失い、傷つき、そのトラウマから逃れられない（岡田 二〇〇〇：三九）。

混沌としたプノンペンを象徴するかのように、一九六〇年代に建設されたモダニズムを極めた集合住宅は朽ち果て、バラックが無秩序に建て増しされ、巨大なスラム街になっている。だがそこもある日突然、警察の実力行使によって住民は追い出される。このような混乱は今も続く。二〇〇一年に新たに土地法が整備されて以降、プノンペンの中心部にあった省庁、教育機関は郊外に移転、民間企業に長期貸与され、オフィスや住居の入った高層ビルや商業施設に変わっていった。生活苦から都市に流入した人々が次々と集まった地域では、強制的立ち退きとそれに対する抗議活動が起こっている。

ポスト・ジェノサイド世代は国内にとどまらない。ポル・ポト政権崩壊後にタイ国境の難民キャンプを経てアメリカ、フランス、オーストラリアなどに移住した約二五万人もの在外カンボジア人の二世、三世も誕生している。『ニューイヤー・ベイビー』のように、自らのルーツを知ろうと両親とともにカンボジアを訪れる者もいる。一方で、『センテンスト・ホーム』のように、一〇代の頃に強盗、暴行、発砲事件などを起こし、所定の刑期を終えていたにもかかわらず、アメリカからカンボジアに強制送還される二世もいる[*4]。家族と永遠に別れ、言葉も文化も習慣も「外国」であるカンボジアでヒップホップミュージックやダンスを伝えるといった活動につなげる者もいる一方で、居場所をみつけられないまま置き去りにされる者もいる（Montaño 2012）。

都市の混沌と錯綜する想い

一四世紀にその由来を持つプノンペンは、今や、自らを「チャーミング・シティ」と命名し、東京二三区に匹敵する六八〇平方キロメートルに人口の約一割にあたる一五〇万人が住む都市となっている[*5]。沼と名のつくところは埋め

られ、高架道路が家々の上に伸び、四五階建ての高層ビルが建築中である（写真2）。ショッピングモールは連日にぎわい、シネマコンプレックスではハリウッド映画が楽しめるようになった。[*6] 住宅団地を塀で囲い、ゲートで人の出入りを制限した、いわゆるゲーテッドコミュニティが七七か所建設され、[*7] 市民の関心を集めている。その繁栄の一方で、二〇〇六年にプノンペン郊外で始まったクメール・ルージュ特別法廷がいまだ決着をみないのと同じく、膨張し混沌とした都市に住む人々の想いの錯綜もまた終わらないでいる。

写真2　建築中の高層ビル（2012年8月筆者撮影）

◉注

＊1　現存する作品に、民話に着想を得た『怪奇ヘビ男』、東南アジア大陸部の上座部仏教圏にのみ伝わっている「五〇のジャータカ」の中の『プットサエンとコンライ嬢』などがある。

＊2　農村地域では、ポル・ポト政権を経ても本質的に社会構造は変わらなかった（小林 二〇一一）。

＊3　たとえば『キリング・フィールド』はタイで撮影を行っている。

＊4　この作品制作の時点で約一五〇〇人が送還の対象となっているという。

＊5　プノンペン市公式ホームページ。

＊6　最近のカンボジア映画の動向については Tilman Baumgärtel 主宰のブログに詳しい。

＊7　プノンペン市公式ホームページ。

◉参考文献

岡田知子（二〇〇〇）「忘却と記憶のはざまで」『総合文化研究』第三号、三五―四〇頁。

小林知（二〇一一）『カンボジア村落世界の再生』京都大学学術出版会。

高橋保（一九七二）『カンボジア現代政治の分析』（国際問題新書三三）日本国際問題研究所。

デルヴェール、ジャン（一九九六）石澤良昭・中島節子訳『カンボジア』（文庫クセジュ）、白水社。

デルヴェール、ジャン（二〇〇二）石澤良昭監修・及川浩吉訳『カンボジアの農民』風響社。

ポンショー、F（一九八六）北畠霞訳『カンボジア・〇年』連合出版。
Abercrombie, Thomas J. (1964) "Indochina's "Neutral" Corner". *National Geographic*. 126 (4): 514-551.
Montaño, Diana (2012) "Khmerican' duo set sights on taking over hip-hop scene". *Phnom Penh Post*.（二〇一二年九月六日）
Muan, Ingrid and Ly Daravuth (2001) *Cultures of Independence*. Phnom Penh: Reyum.
http://southeastasiancinema.wordpress.com/（二〇一二年一一月六日）
http://www.phnompenh.gov.kh/（二〇一二年一一月六日）

映画リスト

『怪奇ヘビ男』……①ពស់កេងកង〔ケンコン蛇〕／The Snake Man、②ティア・リム・クン、③一九七〇年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥東京国際映画祭（二〇一二）。

『九層の地獄』……①នរកថ្នាក់ទី៩／Devĕt kruhŭ pekla、②ミラン・ムフナ、③一九八七年、④カンボジア、チェコスロバキア、⑤カンボジア語、チェコ語、⑥未公開。

『キリング・フィールド』……①The Killing Fields、②ローランド・ジョフィ、③一九八四年、④イギリス、⑤英語、カンボジア語、⑥劇場公開（一九八五）、DVD販売。

『ゴールデン・スランバーズ』……①Le Sommeil d'Or／Golden Slumbers、②ダヴィ・チュウ、③二〇一二年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥東京国際映画祭（二〇一二）。

『一九六五』……①1965、②ノロドム・シハヌーク、③一九六五年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥未公開。

『戦争のあとの美しい夕べ』……①ល្ងាចស្រស់ក្រោយសង្គ្រាម／Un Soir Après La Guerre／One Evening After the War、②リティ・パニュ、③一九九七年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥東京国際映画祭（一九九八）、DVD販売。

『センテンスト・ホーム』……①Sentenced Home、②デービッド・グレイビアス、ニコール・ニューンハム、③二〇〇六年、④アメリカ、⑤英語、⑥DVD販売。

『ニューイヤー・ベイビー』……①New Year Baby、②ソチアタ・パウ、③二〇〇六年、④アメリカ、⑤英語、カンボジア語、⑥難民映画祭（二〇〇八）、DVD販売。

『プットサエンとコンライ嬢』……①ព្រុសែនកន្រៃ／12 Sisters、②リー・ブン・ジム、③一九六八年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥未公開。

『魅惑の森』……①ព្រៃស្រឡាញ់／La Forêt Enchantée、②ノロドム・シハヌーク、③一九六六年、④カンボジア、⑤カンボジア語、フランス語、⑥未公開。

著者紹介

①**氏名**……岡田知子（おかだ・ともこ）。
②**所属・職名**……東京外国語大学総合国際学研究院・准教授。
③**生年・出身地**……一九六六年、兵庫県。
④**専門分野・地域**……カンボジアの文学、文化。
⑤**学歴**……東京外国語大学大学院地域文化研究科（地域文化専攻）。

⑥**職歴**……大学職員（二二歳、二年）、大学助手（三一歳、二年）、大学講師（三三歳、四年）、現職（三七歳から）。
⑦**現地滞在経験**……カンボジア（王立プノンペン大学人文社会学部・留学、二八歳、二年間）。
⑧**研究手法**……資料の収集や作家、出版社、書籍販売者、読者など文学をめぐる人々へのインタビューなどは、フィールドで行うことが多い。
⑨**所属学会**……東南アジア学会。
⑩**研究上の画期**……冷戦が終結したことでカンボジアに和平の兆しが訪れ、カンボジアへの一般的な渡航が可能になったこと。
⑪**推薦図書**……高樹のぶ子編『天国の風：アジア短編ベスト・セレクション』（新潮社、二〇一一年）。
⑫**推薦する映画作品**……『初恋のきた道』（チャン・イーモウ監督、二〇〇〇年、中国）。

【タイ】

新しいヒロイン像
——日本・韓国表象とともに

平松秀樹

一〇年ほど前、チュラーロンコーン大学のある比較文学セミナーにてタイ映画についての議論となり、世界に対してタイの誇る二大映画ジャンルは「ホラー」と「ガトゥーイ[*1]（ニューハーフ）」ものであるという提議があり、参加者全員の首肯を得た[*2]。

現在でもこの二ジャンルに属する映画は盛況であるが、加えて近年では『ブンミおじさんの森』（二〇一〇）のようなカンヌで賞をとる「世界的」作品もでてきた。しかしながら、タイ本国での評価はそれほど芳しくなく、影響力